

「ひ♡、あ…♡う…っ♡うう……っ♡♡」

必死に下腹部に力を入れ、一刻もはやくなかのものをひりだすよう努める。まだ腹のなかがモゾモゾする。少なくともあと三匹はいるだろう。

「う♡、あああああッ！♡♡♡♡」

四つ目の、大きな触手の塊がムリムリッと肉環からのぞく。腹のなかで大きくなりすぎたそれは、出口をめいっぱいこじあけても足りなかったようで、肉環の縁に押しつぶされた短い触手が、ぷちゅんッぷちゅんッ^{はじ}と弾ける音がした。音がするたび、尻にぬるついた液が飛び散る。

「ひい、いいいいッ♡♡♡」

触手には痛覚というものがないのか、幾本もの触手がダメになろうと変わらずモゾモゾと動き続け、少年の内壁のさざめきを借りて、とうとう外界に生まれ落ちる。ズリュリュリュ——ッ！♡♡♡

「んひいいいいッ♡♡♡」

連続で内側から肉環をこじあげられる刺激に、頭が真っ白になる。

ビクビクと痙攣する下半身の先で、はりつめた幼茎が卑猥に跳ねまわる。下肢からこみあげる悦楽に、今にも気を失ってしまいそうだ。しかしまだ、腹のなかに触手が残っている。このまま気を失えばなかでどんどん触手が膨れ上がって排出できなくなる恐怖に、少年は下腹部をいきませ続けるしかない。

「ん”らッ♡♡ン…ッ♡ん”…ッッ！♡♡♡」

五番目ともなるとかなり大きくなっているようで、簡単には出てこない。触手が出てくる感覚は出てくる感覚でおそろしかったが、力んでも力んでも出てこないというのはもっと恐ろしい。

「い”、や”あ…ッ！♡出て……ッはやく…っ出てよ…お……っ！！う”らッ♡♡」

このまま出てこなかったらどうしようという恐怖に、狂ったように尻をうち振るう。そうしていると、

「ひうッ…！♡♡」

みち——ッ♡

という音とともに、やっと触手の一部が窄まりを開け広げる。